

JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Monday 10 May 2004 (afternoon)

Lundi 10 mai 2004 (après-midi)

Lunes 10 de mayo de 2004 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の1 (a) の文章と1 (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。
(コメントリーを書きなさい)

1. (a)

吹きながし

一年のうちのいちばんいい季節になった。旅行もしたいし、おいしいものを食べも
したいし、一日中のうのうと好き自由に休むのも悪くない。そのくせ、大掃除だの洗
濯だのの季節だ、とも思うのである。そういう思いかたに我ながら主婦業の年数をお
もわせられる。

5 女もめきめきと体力がついてくるのは、十五、六、七くらいのときだが、その頃私
は大掃除に畳二枚を両脇に持つことができた。力があるというより上背があるので出
来たのだろう。

10 忘れがたいのはその折に風というものを知らされたことである。午後になって庭か
ら畳を選び入れようとして、横から風をうけた。畳自体の重さがいいかげんあるとこ
ろへ、畳の大きさだけの抵抗で風を受けたのだから、ちよっとう貧血するような感
じでじっとこらえたのだが、もちろんそのあいだは立ち停^{とど}まっていた。動けなくなった
のである。一ト吹きの風の長さがよくわかった。よくもあの時ほうり出さなかったも
のだが、手を放すこともできなかったのかとも後に思う。馬鹿らしい話だが、そのと
15 き風のこわさを知った。あらしの風などは知っているが、そんなものではなくてもっ
とずっとこわく思った。

20 のちにだんだん思えば、あらしの風へもつ恐れは、あれはいわばみんなに配給され
ている恐ろしさであり、畳のときは私に襲^{おそ}ってきたこわさ、私が辛うじてこたえ得た
こわさなのである。不意打ちとか、思いもかけぬとかいうやられかただった。そして
そのとき以来私は風とは、縞^{しま}模様がついているものだ、と信じているのである。突飛^{とつひ}
なことをいうように聞えるだろうが、一ト吹きの風の塊^{かたまり}りは、頭も尻尾も平均した力
25 で吹くのではなかった。よろけ縞とかやたら縞とかいったかたちの、太いところも細
いところも干切れもかすれもある縞模様をもって、一ト吹きの風の力は構成されてい
る、と私は信じるのだ。けれども念^{なま}の為^{ため}に言うが、この時の風は突風やなにかではな
いので「風が出てきたわね」程度だったのである。風が吹けば桶屋が儲かるが、私は
30 こわいことをおぼえた。町会の定めた大掃除の日に今年も風があれば、私は畳はごめ
んこうむる。

きょう少し遠いところへおつかいに行った。ときどきそこへ行くのだが途中に去年
から土手を築いているところがある。新しく電車を通す道である。それが出来ていた。
築きあげた斜面の土は乾いて、まだ雑草一本生えていない裸だ。土手下の家は埃をか
ぶって屋根瓦が白茶け、だが高々と鯉^{こい}のぼりが立っていた。えらく鯉のぼりが生き生
30 きとしていて出来上がって乾いている土手も、もりもりした勢いで遠く伸びていて、
いい景色だった。どんな男の子がいるのか知らないけど、しっかりやってくれえと声

35

がかけたい気の弾^{はじ}みをうけた。

吹きながしというけど、あれは利口^{りぐち}なのだろうか。ばかなのだろうか。吹き流しにすればすらりと行くかわり、とどまるものはない。

(幸田文「吹きながし」、『雀の手帖』、一九五九年)

(注) 幸田文(一九〇九―一九〇)……小説家。随筆家。代表作に『流れる』

『おとうと』がある。明治時代の文豪・幸田露伴の次女。

風が吹けば桶屋^{おけや}が儲^{もち}かる……一つのできことがめぐりめぐって思いがけないところに影響を及ぼす。

吹きながし……数本の細長い布を、さおの先にあげて風になびかせるもの。

―この随筆の中には、どのような「風」が描かれていますか。

―「風とは繻^{ちゆう}模様がついているものだ」という作者の確信は、どうして生まれたのですか。

―表題の「吹きながし」には、どのような意味があると思いますか。

―このエッセイの書き方、構成、文体などがこの作品の中でどのような効果を与えているかについて、あなたの考えるところを述べなさい。

1. (b)

鶯^うの音楽

耳の遠くで鶯^うが鳴きはじめる

ぼくはあなたがこの世で占めている位置と
その位置の周囲にしか住めないぼくを知っている

竹の葉は無心にさやきながら

5 頂から少しずつ陽さしのなかに落けてゆく

そのような甘美な昇華だけが
しばしばぼくを訪れてくる

すると明るい天の円^{まへ}みの一方から

ぼくをしきりによびさます

10 ふしぎな鶯^うの音楽がきこえてくるのだ

竹の多いふるさとの その空で鳴く

鶯^うの声ばかりを聴いてぼくは育ってきた

ぼくはいつでも恋している

微風の循環するこのめぐりの

15 もはやエーテルになってしまったぼくそのものに酔いながら……

(伊藤桂一『竹の思想』、一九六一)

(注) 伊藤桂一(一九一七〜)……詩人・小説家。昭和一三年から終戦まで軍隊に勤務。代表作に詩集『竹の思想』、小説『螢の河』などがある。
鶯^う……人の住まいの近くにいる猛鳥のこと。鳴きながら、ゆっくり輪をかいて飛ぶ。トンビとも呼ぶ。

ーこの詩のテーマは何であると思いますか。

ー詩の中の鶯^うの鳴き声や竹のさやぐ音などは、この作品の中でどのような効果をもたらしていますか。

ーこの詩の中では、どのようなリズム・イメージ・比喩などが使われていますか。